

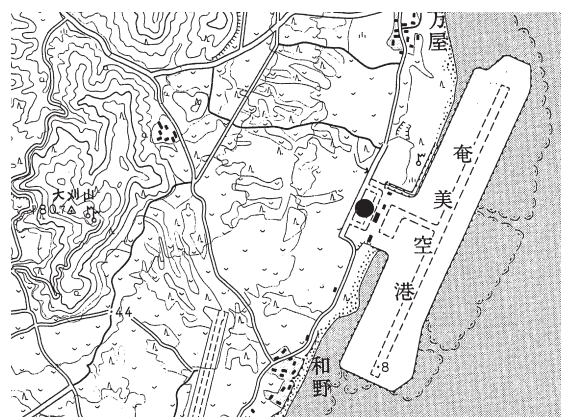
(大島郡笠利町和野長浜金久)

## 位置と環境

長浜金久遺跡のある笠利町は奄美大島の中では北部に位置し、南北約15km、東西約4.5kmの細長い半島である。

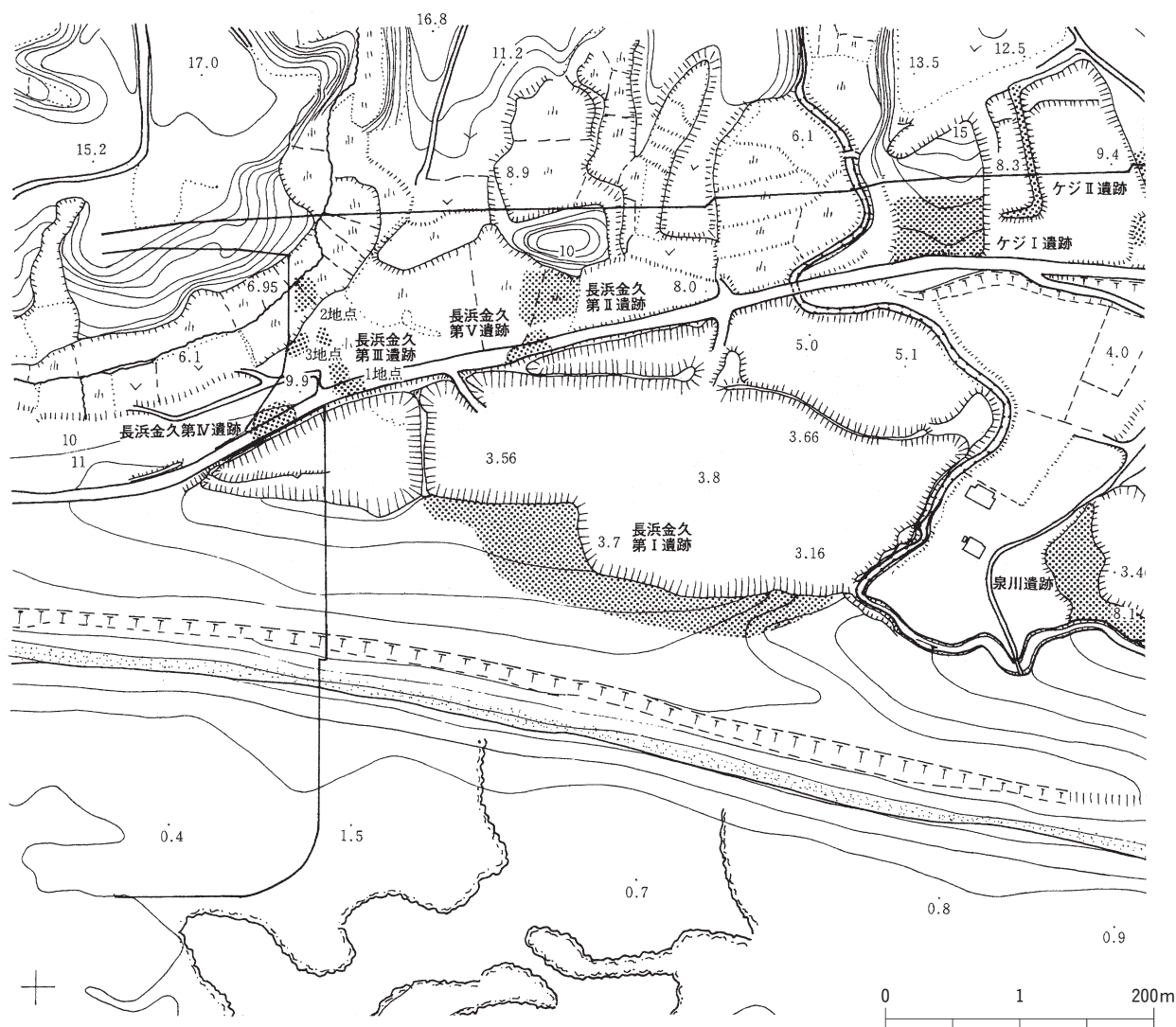
長浜金久遺跡の地形は後背地標高15m～50mの丘陵の前面に砂丘が発達している。砂丘は南北に長く形成されている。その距離は約1kmになる。標高は約13mである。この砂丘全体が遺跡になる。縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代までの複合遺跡である。

砂丘の形成によって時代が違う。砂丘の形成は4段階に形成され、遺跡は3段階まで形成されたと報



第1図 長浜金久遺跡の位置

告されている。砂丘形成の地形から山手側を長浜金久第2遺跡、海側が長浜金久第1遺跡とされ、さらにその間にもう一つあり、長浜金久第3遺跡と分けられた。調査の結果新たな地区からも遺物の発見が



第2図 長浜金久遺跡の地形と調査区

あり、第4、5の遺跡が発見された。

遺跡の立地と砂丘の形成は時代によって立地条件が変わる。砂丘形成の地形とクロスナ層の確認が必要である。

#### 調査の経緯

笠利町万屋・和野地区に奄美空港の建設計画に伴い、県土木部空港対策室から埋蔵文化財についての調査依頼があり、1部の現状保存と記録保存を行うため県教委が発掘調査を1983年（昭和58年）1月に第1次調査を実施した。1983年10月に第2次調査、1984年4月から7月まで第3次調査行われた。その後、1984年10月から1985年3月まで下山田、ケジ遺跡が踏査され、1985年4月から11月までケジ1・3、泉川遺跡がそれぞれ空港建設に伴い調査が行われた。長浜金久第3、4、5遺跡は1986年9月から調査が行われた。

唯一長浜金久第2遺跡の住居跡を含めた1部分は現状保存され、緑地帯として残されている。ほかは記録保存である。

#### 長浜金久第1遺跡

長浜第1遺跡は海岸に近い遺跡で出土遺物もマツノト遺跡、用見崎遺跡と類似する。いわゆる兼久式土器と土師器が出土しており、時代もカーボン測定値などを参考に6世紀から10世紀前後と考えられている。兼久式土器については新たな資料の発見などがあり、今後も分類研究が続けられている。遺物はヤコウガイ製貝容器などが多く出土している。

鉄器はへら状製鉄器、釣り針などが出土しているが全体的には少ない。

石器は凹石、敲石、クガネ石など36点が出土している。第1遺跡が3,600㎡の大規模からすると少ない。鉄器の普及で石器が姿を消し始めたことも考えられよう。

遺構についてははっきりしたものがなく、マガキガイやヤコウガイなどの貝だまりや破碎された貝殻などがまとまって出土していた。

#### 長浜金久第2遺跡

第2遺跡は山手に近いもっとも古い砂丘上に形成されている。

出土遺物から縄文時代が主で弥生時代の遺物も出

土している。

遺構は住居跡、炉跡、集石、土壇などを検出している。住居跡は2.3m×2m、深さ20～30cmの竪穴住居跡で一部石囲いが残る。

土器は面縄東洞式、嘉徳I式土器を主としている。出土量も多い。宇宿下層式土器の分類や土器編年作業に欠かせない資料である。

貝製品はオオツタノハ製貝輪が多く出土している。そのほかに貝製品、ヤコウガイ製貝鏃、貝匙状貝製品などが出土している。

#### 長浜金久3遺跡

1984年に試掘され、遺物の出土があり、1986年に第3、4、5遺跡が調査される。

長浜金久第3遺跡は第1地点、第2地点、第3地点として発掘調査が行われた。第1地点ではマガキガイ、イソハマグリの貝が多く、貝の中に土器や貝製品が混入している状態であった。土器は南九州の成川式土器、免田式土器など弥生後期の土器が入っていることが注目される。貝製品もゴホウラ製貝輪、貝製容器などが出土している。第2地点は兼久式土器が少量出土し、第3地点は江戸時代の染め付け陶磁器の出土や掘立柱建物跡の検出があった。第3遺跡は弥生時代の特徴を持つ遺跡である。

#### 長浜金久第4遺跡

第4遺跡は第3遺跡の南側にほぼ南北にのびる砂丘上に位置する。遺跡の中心部分は砂採り工事で破壊されていた。第3遺跡同様にマガキガイの貝だまりがある。土器は山ノ口式土器の甕形土器、山ノ口式土器の影響を受けた土器と思われる土器や外耳土器なども出土している。弥生時代中期頃とされている。そのほかに大型の磨製貝鏃も出土している。少量ではあるが兼久式土器も出土している。

第4遺跡も弥生時代の特徴を持つ遺跡であり、南九州とのつながりが明確になってきた。

#### 長浜金久第5遺跡

第5遺跡は第2遺跡の東側に位置する。出土遺物は亀の甲タイプ土器からくびれ平底で底部に葉痕を有するいわゆる兼久式土器も出土している。遺物は量的には少ない。遺跡の大半が消滅しており、遺跡は弥生時代前期から中期の時期とされている。

## 特徴

長浜金久遺跡は縄文時代から弥生時代、古墳時代  
奈良・平安時代までの遺跡群であることがわかった。  
砂丘の形成とともに土器が違い、時代の変遷が解る  
貴重な遺跡である。

## 資料の所在

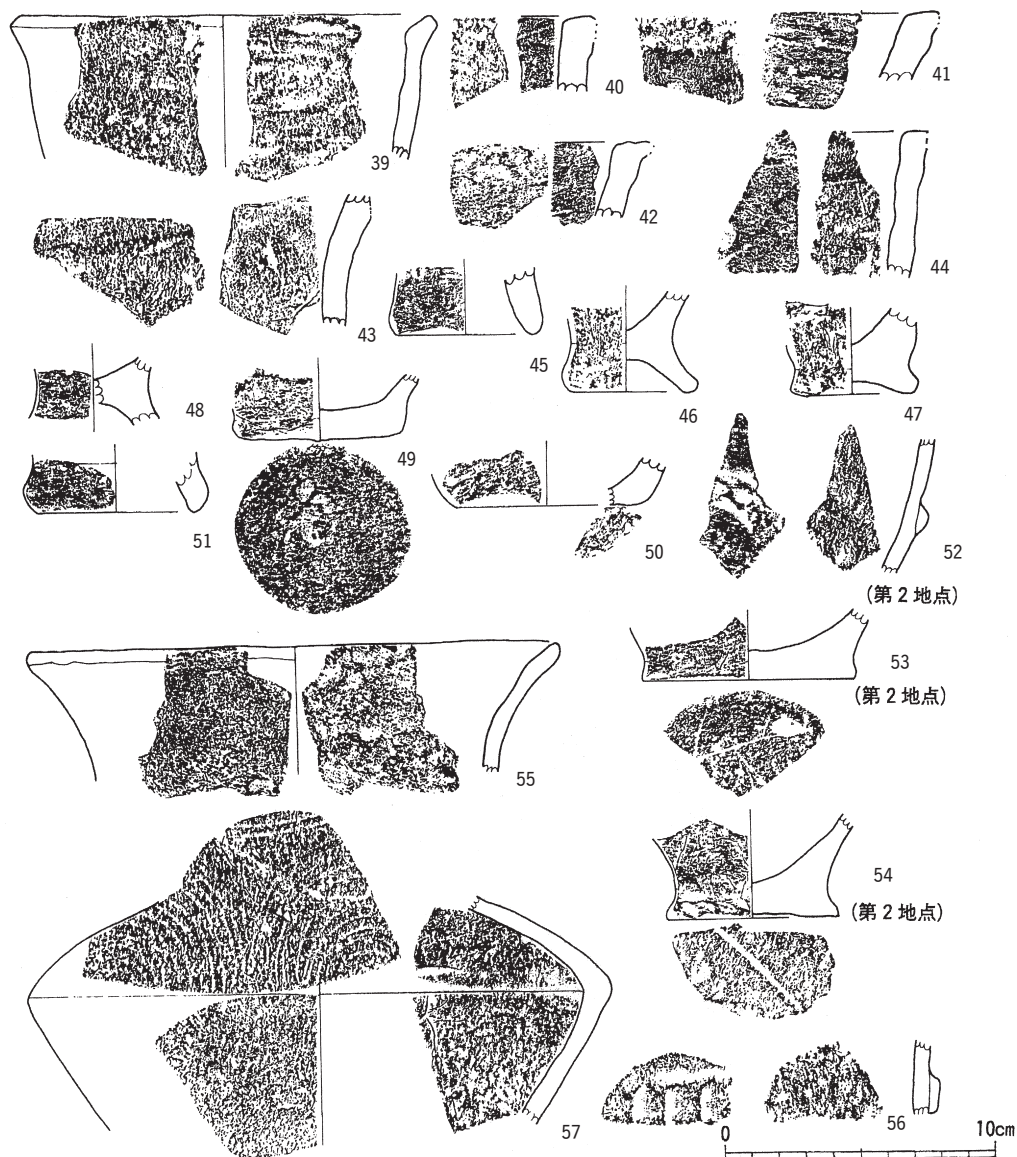
出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保  
管されている。

## 参考文献

鹿児島県教育委員会1984「長浜金久遺跡」『鹿児島  
県埋蔵文化財発掘調査報告書』31  
鹿児島県教育委員会1985「長浜金久遺跡」『鹿児島  
県埋蔵文化財発掘調査報告書』32

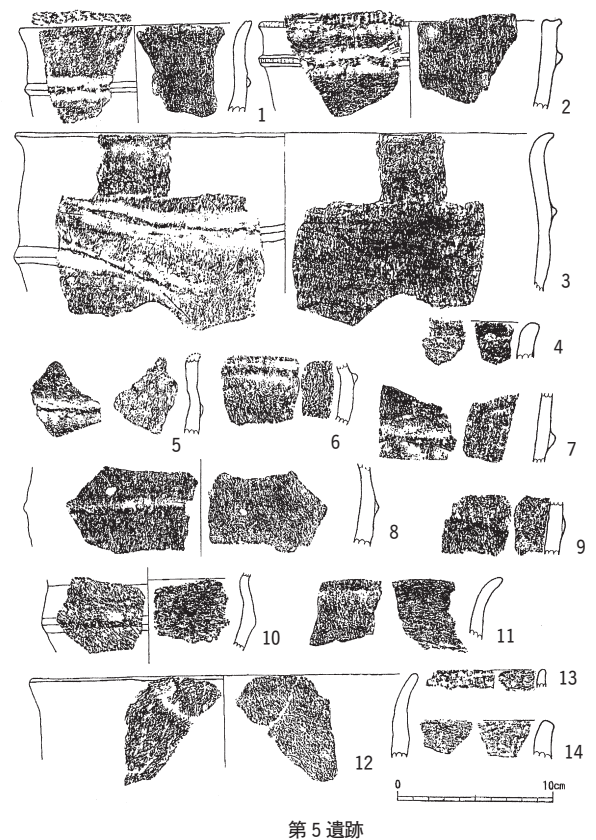
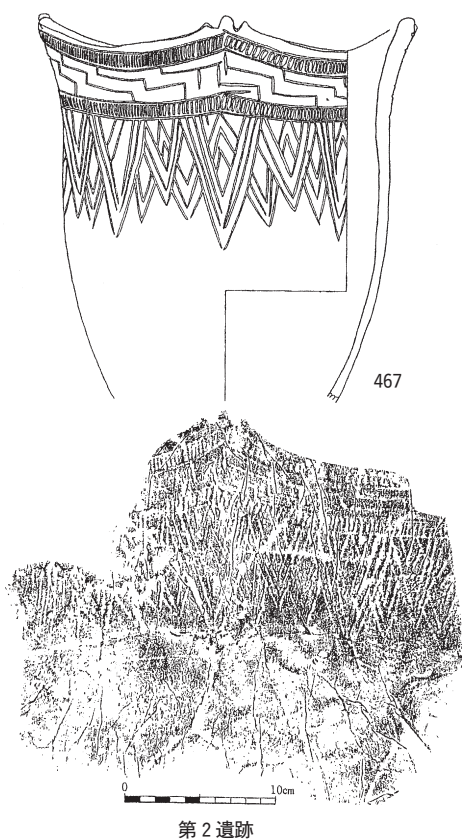
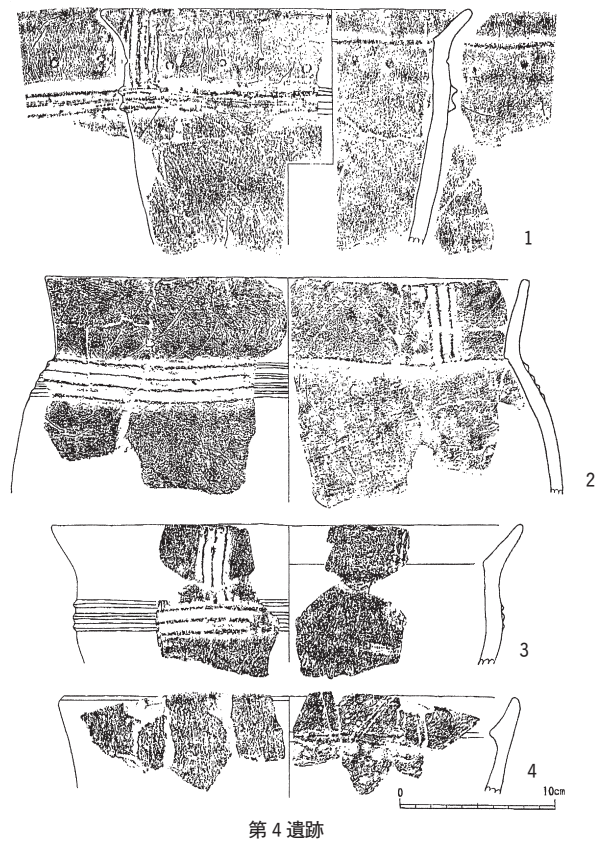
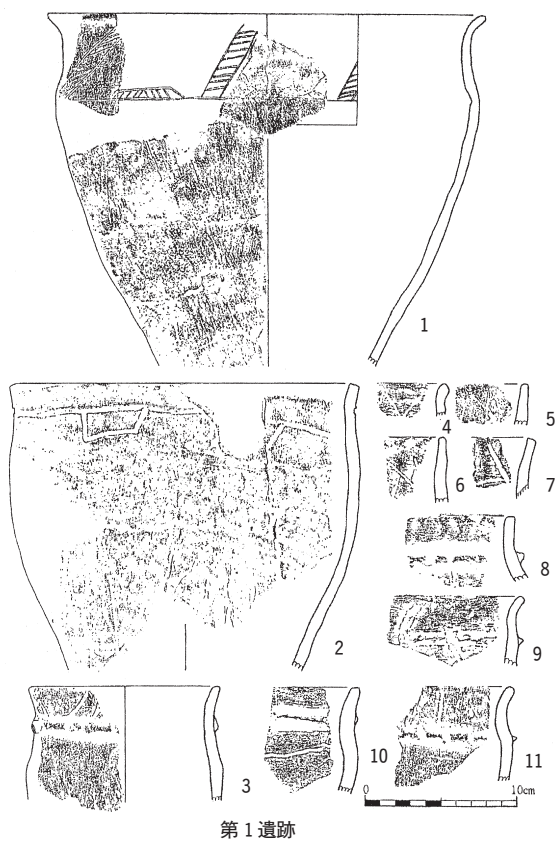
鹿児島県教育委員会1987「長浜金久遺跡（第Ⅲ・  
Ⅳ・Ⅴ遺跡）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』

(中山清美)



第3図 長浜金久Ⅲ遺跡出土土器





第4図 長浜金久 I・II・IV・V 遺跡出土土器